



## JALT JSL SIG NEWSLETTER

Issue #16 (2) [serial 39] Fall 2019 (秋号)

JSL 会員の皆様、やっと涼しくなってきましたね。皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

もうすぐJALT2019の年次国際大会が名古屋の愛知県産業労働センターで開催されます。  
(<https://jalt.org/ja/conference/jalt2019?translation=ja>) JSLでは2019年11月2日(土)の午後4:25から5:55まで(90分間)906号室にて、『office Japanese』と題して英語でフォーラムを開催します。詳しくは以下のサイトをご覧ください。

<http://hosted.jalt.org/jsl/puroguramu.htm>



(庭先のサルズベリ)

皆様とお会いできるのを楽しみにしております。JALT JSL代表 川手 Mierzejewska 恩

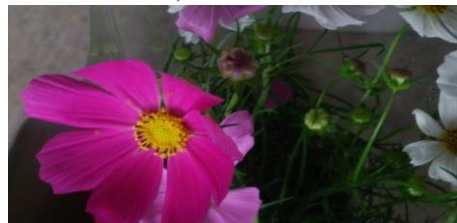
This issue starts with SIG news business reports including Call for papers for JSL News letter. You can then find the brief announcement about JSL forum 2019. From featured articles, you can first find “Recent trends on the Japanese language education” contributed by Yuichi Sunakawa, and a practical report contributed by Asako Yamaguchi. From the website review, Erica Kaku reviewed a website of

“The Japan Foundation Japanese-language Institute, Urawa.”

Finally, the last page shows SIG membership information.

We would like to express our appreciation to people who contributed their articles to this JSL Newsletter, and kindly supported our editorial team.

The JSL SIG Newsletter editorial team  
Megumi Kawate-Mierzejewska,  
Maki Hirono, Yo Kawate



(庭先のコスモス, Oct. 2019)

### IN THIS ISSUE

Greetings	1
SIG News	2
JSL Forum 2019 Preview	3
Feature Articles	3-7
Review	7
Sig information	8

## SIG News/Business

### ▶ Call for Articles: JALT JSL SIG Newsletter (JSL SIG NL)

You are all invited to contribute your research articles, teaching approaches, updated information, essays or book reviews in the area of Japanese language education to the next issue of JSL SIG. We accept articles related to JSL/JFL in either Japanese or English.

For the next issue, submit your contribution by February 15, 2020, to

[naganomamo@yahoo.co.jp](mailto:naganomamo@yahoo.co.jp). Please email [naganomamo@yahoo.co.jp](mailto:naganomamo@yahoo.co.jp) for more information as well.

### ▶ Forthcoming Conference:

#### JALT2019

The 45th JALT Annual International Conference 2019 will be held at WINC, Aichi in Nagoya on November 1st - 4th in 2019.

11月初旬 (2019年11月1日から11月4日) に、名古屋の愛知県産業センター ウィンクあいちにて、第45年次 JALT 国際学会が開催されます。



#JALT2019 • NAGOYA 11.1-11.4

Please visit the following site for more information.

<https://jalt.org/conference/jalt2019>

### ▶ JLSIG Forum2019

It is scheduled for

**Day:** Saturday, November 2<sup>nd</sup>, 2019

**Time:** 4:25 PM - 5:55 PM (90 minutes)

**Room:** 906

Please visit the following site for more information.

<http://hosted.jalt.org/jsl/puroguramu.htm>

### ▶ JALT2019 JSL SIG AGM

It is scheduled for

• **Day:** Saturday, November 2<sup>nd</sup>, 2019

• **Time:** 3:15 PM - 4:00 PM (45 minutes)

• **Room:** 906

In this meeting, we will look back our previous activities, discuss plans for future JSL SIG activities, publications, and elect officers for 2020.

### ▶ JSL SIG Table

A JSL table will also be set to further promote JSL SIG to JALT2019 participants

### ▶ JSL related JALT 2019 presentations

Research oriented short presentation  
Reanalysing the Direct Teaching Method  
[aharuddin, Azalia - Utsunomiya University](#)  
Mon, Nov 4, 1:20 PM - 1:45 PM; 904

Poster sessions

**Sun, Nov 3, 3:25 PM - 4:55 PM; 1002**

Developing JFL Teachers Through Teaching Practice

[Inaba, Midori - Aichi University of Education](#)

Career Choice of a Young JSL Preservice Teacher

[Seo, Yukiko - Dokkyo University](#)

# JALT 2019

## JSL SIG Forum Preview

### 職場での日本語

Office Japanese

Date: November 2, 2019 (Sat.)

Time 16:25-17:55

Room 906

### Abstract

Using both interview and observational data, the presenters in this forum will discuss communication problems between native and non-native speakers of Japanese working in offices; e.g. at companies and in schools. We will also suggest ways of improving communication between native and non-native speakers.

MC Mayumi Shibakawa

### Presenters and titles

#### 1. Frazer Smith

“Communicating in the third space: speaking Japanese at work”

#### 2. Shota Fujii

“Some factors affecting workplace pragmatics at Japanese higher education institutions”

#### 3. Shingo Moriyama

“Conversation breakdown and recovery strategies by non-native Japanese speakers”

## Future Articles

### 日本語教育界の“風”を読む

Recent trends on the Japanese language education

砂川裕一 群馬大学名誉教授

Professor Emeritus, Gunma University

国際交流基金日本語国際センター所長

Executive Director, The Japan

Foundation Japanese-Language

Institute, Urawa

2001年10月5日に、「大学日本語教員養成研究協議会（大養協）」と「国立大学日本語教育研究協議会（国日協）日本語教員養成部会」の合同部会が、「日本語教員養成カリキュラムに関する諸問題」をテーマとして立命館アジア太平洋大学で開催され、発言する機会があった。その「発言要旨」の中に以下のような記述がある。

「日本語教育が狭い意味での「言語教育」の枠から「異文化理解教育」「多言語・多文化・多民族の共生のための教育」・・・へと理念的にシフトしていく傾動を読み取ることができる。そして、それはまた、日本語教育を取り巻く環境の変化や教育現場の実態、また言語やコミュニケーション研究の進捗に応ずる積極的な脱皮の試みとも言える・・・。「言語を教える」教員が、いかなる視界を確保しなければならないか、あるいは少なくともどの程度の視界を確保することが望ましいと考えられるか、その問いは翻って言えば、「言語」という対象や「言語習得」さらには「コミュニケーション」という人間的な活動が従来のような視野の広がりでは捉えきれないことの別表現として問われているとも言えよう。」

また、2007年5月に発行された『アソシエ 21・ニューズレター』（アソシエ 21）の巻頭に「言語・社会・文化の統括的教育実践の理論化という課題」という短文を書いたことがあったが、その一節に以下のような記述がある。

「ここに言う“言語的”コミュニケーションの“社会的・文化的”実態は、異社会で太過なく過ごしていくための単なる言語的・社会的“順応・適応”や異文化の“単なる知的な理解”の水準に止まらない。それは実践的な場面に於いて「自らの立場を自覚しつつ、同時に相手の立場に身を置きつつ、相手にとっての状況・世界を追体験しうる想像力＝創造力と、その状況・世界が相手にとっては紛れもない現実であることを許容できる柔軟性を獲得する」ということである。そしてそれはまた第二言語教育のみならず教育そのものの在り方を、従来の“知の伝達を専ら旨とする在り方”から「複合的な日常生活世界のその都度の関係の場を自らの関心に応じて言説化できる能力を目指す在り方」へと推し進める重要な契機をも孕んでおり、さらには、この“知の伝達から場の言説化能力へ”という知の在り方の変化の方向」は、近代知の個別性、個別性故の視野狭窄、視野狭窄故の知的な限界性を超越する手がかりをも示唆しているはずである。」

いずれも、ホコリにまみれた旧稿からのしかも文脈を度外視した自家引用ではあるが、そこで指摘しようとした“日本語教育界を取り巻く社会的・学術的な状況・趨勢”は現在も事実上ほとんど変わっていないように思われる。むしろ日本語教育「界」が求められている様々な対応が、より具体的かつ個別的な錯雑性のもとで要請されるようになってきているのではないか。その意味では、困難は累進しているとも言える。

とは言え、日本の地域社会における日本語教育や多文化・多民族共生のためのシステム作りに関しては文化庁がかねてから事業展開を試みており、諸外国における日本語教育や日本語教育人材の養成に関しては従来から国際交流基金が言語文化外交の一環として活動を続けてきており（しかしその基金が、教員養成においても学術的研究においても、海外における日本語教育指導者の養成を担う大学院プログラムから撤退したことは残念なことであった）、日本国内

の高等教育レベルにおける日本語教育や各種教育研究機関の国際化のための施策について、また初等中等教育段階における日本語教育や児童生徒の受け入れ体制に関しては文部科学省が、入国管理に関しては法務省（つい先日「出入国在留管理庁」が新たに発足した）が、また国会においては超党派の議員連盟がいわゆる日本語教育基本法の制定を進めている。

労働者を日本に送り込む立場にある諸外国、特に東南アジア諸国においては、大小様々な人材派遣会社や人材養成のための日本語教育機関が林立していると聞く。CEFRやJFSが教育水準の指標としてまた評価基準としても言及されることも多くなり、国の内外を包括する新たな体系的“スタンダード”の構築も進む。NPOやNGO、日本語教育学会をはじめとした各種法人・団体・教育研究機関などによる日本語日本事情教育（日本語の社会的運用力の育成／日本語媒介的な文化的理解力の育成）、遡っては言語・社会・文化の諸概念の再規定の模索や統括的な教育実践の求められるべき姿の捉え返し進む。20年前の状況と何も変わっていないわけではない（困難の累進だけではない）、ようではある。

さらに言えば、予算化を伴った国策の一環としての日本語教育関連の様々な動き（その意味では、今は、日本語教育界に“風が吹いている”と言えるのだろう）を積極的に活かすことが求められているとも言える。しかし、“風”は気まぐれでもある。日本語教育界の学術的・実践的な多様かつ真摯な試みが思わぬ方向に吹き飛ばされてしまうことも考えられる。

関係者は、その“風”を読み切り、捉えることができるだろうか。



(秋の雑草)

## 「社会とつながるプロジェクト」 を通した

### 学習者の変容と成長

山口麻子 Asako Yamaguchi  
 テンプル大学ジャパンキャンパス  
 Temple University Japan Campus  
 .....

#### 1. はじめに

外国人労働者の受け入れが本格化する中で、多文化共生社会をいかに実現するかが日本社会、そして日本語教育の課題となっている。本稿では、社会参加を通して日本語学習者の成長を促そうとする教育方法を紹介し、テンプル大学ジャパンキャンパスの実践を報告する。

#### 2. 「社会参加を目指す日本語教育」について

我々日本語教師は、学習者の日本語能力の向上を目指し、日々格闘している。大量の宿題を添削し明日の教案や準備に追われているが、果たしてこれでよいのだろうかと時に自問する。佐藤・熊谷(2011)は『社会参加を目指す日本語教育—社会に関わる、つながる、働きかける』の中で現行の日本語教育の問題点として、以下の3つを挙げている。

第1に、ネイティブが話す日本語を身につけることを目標とする自体に問題があると述べる。言語は多様で時代とともに変化するものであるため一義的に「ネイティブの日本語」を目指すことそのものに疑問を呈している。第2に、知識を教授し、学習者の習得を判断することを教師の役割とすると、学習者は受け身的な立場にならざるを得ない。学習者の主体性、自主性を育成するために、個々の興味や目的、ニーズを重視する必要があるという。第3に、学習とは知識の積み上げであるという概念は、近年多くの批判がある。学習とは周りとの関わりによって個人が変化する過程と考えるべきである。そのため、学習者が社会の中で問題解決し、評価し、個人が変化していく「社会文化的アプローチ」を日本語教育に取り入れるべきだと主張している。

佐藤・熊谷(2011)が提唱する「社会参加を目指す日本語教育」では、言語教育の究極の目標は、社会との関わりを通して、成功と失敗から学び、自己を表現していく力をつけることである。そのため、積極的な社会参加が必

要だとする。学習者は、参加するコミュニティのルールを知りそれを守りながらも批判的視点を持ち続け、変えるべきと思うことは変える努力をすべきだとする。つまり、いわゆる「お客様」としてではなく、責任あるコミュニティの一員としての役割を果たすことが求められるのである。

#### 3. 社会とつながるプロジェクトの実践

筆者が勤務するテンプル大学ジャパンキャンパスでは、この「社会参加を目指す日本語教育」の実践として「社会とつながるプロジェクト」を卒論コースに取り入れた。テンプル大学ジャパンキャンパスは1992年にアメリカ大学の日本校として開校し、2010年には日本語専攻を開始し、現在は77名が日本語を専攻し、卒論を書いて卒業することを目指している。日本にあるアメリカの大学という位置づけのため、学生たちは「テンプル村」と我々が呼ぶ快適な英語環境からなかなか抜け出すことができず、「井の中の蛙」状態であることが、長年の課題であった。日本語専攻の目標として「日本語を使ってグローバル社会に貢献できる人材の育成」があることから社会とつながるプロジェクトを通して、日本社会とつながり成長してほしいという願い、2017年からこのプロジェクトを実施している。

コースは「現在の日本社会の問題に対して、自分が貢献できることを見つける」ことを目標とし、日本社会について知るための読解とディスカッション、自分の卒論のための文献調査と文献の要約に加えて、社会とつながるプロジェクトを8週間に渡って行った。具体的なコース設計については、『日本語で社会とつながろう—社会参加をめざす日本語教育の活動集』(2016)を参考にした。学生は、自分の興味があるテーマに沿ったNPOや団体を自分で見つけ、1週間に1度活動し、2週間に1度クラスで活動報告し、活動が終わった後9週目に振り返り報告をする。文献調査とプロジェクトを結び付け、学期末にクラスでプレゼンテーションを行い4000字以上の論文を提出するというのが流れである。

#### 4. 学習者の気付きと変容

通常のクラス活動と並行して学外での活動を毎週行うことは、学生の負担も大きく当初は不満の声も聞かれたが、8週間を終えて、個々の学生が気づいたこと、学んだこと、そして成長ぶりは、筆者の予想以上だった。

以下、何例か紹介する。アメリカ人のMは、LGBT (性的少数者の総称) のために活動するNPOに通い、ディスカッションに参加したり、新宿のバーを回って避妊具を配る活動を行ったりした。LGBTの日本における問題に直面し、当事者として何か行動を起こすことの重要性を痛感したと話している。アメリカ人のGは、人付き合いが苦手なコミュニケーションがうまくできないことを悩んでいたが、ボランティア先に選んだ高齢者施設で、素晴らしい出会いがあった。親身になって世話をしてくれる日本人との出会いを通じて自分に自信を持つようになり、日本での就職活動に挑戦することを考えるまでになった。パキスタン人のJは、二つの介護施設でボランティア活動を行い、「高齢者たちは力がなくても生きていきたい気持ちを持っているのに驚いた。自分も何があっても生きていけると思った」とコメントしている。高齢者と接して自分の老後を考え、経済的な安定のために投資をしようと思ったと話している。心理学との二重専攻のアメリカ人のMは、障害者や高齢者の余暇活動を行うグループの活動に参加し、「何かをしてあげるのではなく、一緒に楽しくすることが老人にとって重要だと学んだ」とコメントしている。Mは障害者と他者との関わりについて論文を書き、現在は大学院に進学し、特にスポーツを通しての関わりについて研究を続けている。アメリカ人のTは東京防災をトピックに選び、様々な地域の防災イベントに参加した。イベントに参加しても所在がない様子が当初うかがえたが、ある日本人ボランティアとの出会いをきっかけに考えが変わり、「防災イベントは無意味だと思っていたが、災害の際に協力できるコミュニティーを作るために役立っていると分かった」とコメントしている。文献調査から、外国人が防災計画に企画段階から入ること

が重要とわかり、自分の地域の自治体にアプローチすることを考えている。Tは母国に帰国せず、日本に定住することを希望しており、居住外国人として今後の防災面での活躍が期待される。シンガポール人のCは、貧困問題をテーマに選び、東京のフードバンクの活動に参加し、貧困の一因である高校中退について研究した。その後Cは、アメリカの本校に出向いてプレゼンを行い、米国市民がこの問題について知る機会を提供した。Cの研究は筆者自身にも衝撃を与え、日本語教師として社会に貢献できることを考えさせ、現在、外国とつながる子供の支援に繋がっている。

#### 5 まとめ

以上のように、学生たちは日本の社会と直接的につながることで、今後の自分の人生を考えたり、社会での自分の役割を考えたり、進学先を考えるようになった。教師の役割は、その活動の報告を受け、支え、相談に乗るといった補佐的なものだった。まさに、主体性、自主性を持った学生の学びである。中には、ボランティアとして採用されるまでに何度も面接に落ちた学生もいたが、その失敗を通して社会の厳しさを学んだと話している。

佐藤・熊谷 (2011) が勧める、社会との関わりを通して成功と失敗から学び、自己を表現する力をつける、という言葉教育の目標に近づくことができたとと言える。佐藤・熊谷 (2011) は、「社会参加を目指す日本語教育」では、教師自身も積極的に社会とつながり、学習者とともに学ぶ姿勢が重要としている。筆者も学生たちを通して日本社会を学ぶ機会が得られたことに感謝しこれを糧にさらに学生たちのよき支えになれるように努力していきたい。

参考文献は7頁の冒頭に続く。

## 参考文献

佐藤慎司、熊谷由里 (2011) 『社会参加をめざす日本語教育－社会に関わる、つながる、働きかける』 ひつじ書房  
西俣(深井)美由紀・熊谷由里・佐藤慎司・此枝恵子(2016)『日本語で社会とつながろう！－社会参加をめざす日本語教育の活動集』コ出版

## Website Review

The Japan Foundation Japanese-language Institute, Urawa.  
国際交流基金：  
日本語国際センター  
.....

本ウェブは、日本語と英語の両方からなります。常に情報を更新しているのですが、本レビューは2019年6月の時点でのものです。Reviewed by かくえりか

国際交流基金日本語国際センターは、1980年代が終わる頃、国際交流基金の研修機関として埼玉県浦和市に設立されたようです。事業内容などに関しては、以下のサイト参照してください。

<https://www.jpf.go.jp/j/urawa/about/message.html>

本サイトは5つの項目、「ホーム」「日本語国際センターについて」「海外日本語教師養成・研修」「日本語教材・教授法等の開発」「図書館」からなり、それぞれの項目で大変興味深い内容が紹介されています。

<https://www.jpf.go.jp/j/urawa/about/message.html>

「ホーム」には、それぞれの項目を紹介し、『お知らせ』と『更新情報』という二つの柱があります。『お知らせ』欄では、最新のニュースを紹介しております。内容はセンター職員の募集、『国際交流基金日本語教育』投稿案内、研修プログラムに関するお知らせ、海外ボランティア活動に関するお知らせ等々、様々なニュースを提供しているようです。『更新情報』の欄では、『日本語教育指導

者養成プロジェクト』をはじめとする様々なプロジェクトの過去の事業の経過報告や新着図書の情報などが紹介されています。

次に、「日本語国際センター」これまでの「海外日本語研究会」の開催テーマを写真なども使って紹介していて、大変興味深いものを紹介しております。例えば第21回は「21世紀の人材育成をめざす東南アジア5か国の中等教育における日本語教育－各国の教育文書から見える教育のパラダイムシフト－』という題で公開シンポジウムを開催し、中等教育における日本語に焦点をあてています。基調講演では、国立教育政策研究所の松尾知明総括研究官による基調講演の概要が紹介されています。[https://www.jpf.go.jp/j/urawa/about/world/wld\\_repo\\_160130.html](https://www.jpf.go.jp/j/urawa/about/world/wld_repo_160130.html)

次の項目である「日本語教師養成・研修」では、四つの内容からなる「公募研修プログラム」を紹介しています。それらは、それぞれに「海外日本語教師基礎研修」「海外日本語教師日本語研修」「海外日本語教師教授法研修」「海外日本語教師テーマ別研究」となっております。) 例えば、2019年度の「海外日本語教師テーマ別研究」は、「21世紀型スキル」「ビジネス日本語」「コースデザイン」という三つの項目からなり、それぞれの研修期間が、3から5週間のようです。<https://www.jpf.go.jp/j/urawa/>

最後に、「日本語教材・教授法の開発」のサイトでは「JF 日本語教育スタンダード」「みんなのCan-doサイト」「みんなの教材サイト」「丸ごと日本語の言葉と文化」「web版エリンが挑戦日本語出来ます」「日本語教育通信」というサイトが紹介されています。

[https://www.jpf.go.jp/j/urawa/j\\_rsorcs/j\\_rsorcs.html#04](https://www.jpf.go.jp/j/urawa/j_rsorcs/j_rsorcs.html#04)

それぞれのサイトが素晴らしいものです。

## JSL SIG Membership Information



### 日本語教育研究部会

日本語教育研究部会（JSL SIG）は、第二言語・外国語としての日本語指導・日本語学習・日本語教育研究の向上を目指し、指導・学習・研究のための資料や情報を提供しています。更に、専門家の育成の為に外国語教育における日本語教授法や言語学（心理・社会言語学なども含む）の研究推進にも力をいれています。日本語の指導者・学習者・研究者の積極的なご参加を歓迎致します。

#### ▶ 日本語教育研究部会メンバー募集

本部会 JSL SIG は現在 50 名ほどの会員がおりますが、会員数を増やし更にネットワークを広げるべく、常時会員を募集しています。皆様の同僚やお知り合いなどにも、是非ともご周知下さい。

#### ▶ 会員のメリット：

1. 論文集『JALT 日本語教育論集』に投稿できる(2年に1回発行、査読あり)
2. 定期的にニュースレターがだされる
3. ニュースレターに論文や学会レポート、日本語の教え方・学び方、その他会員の学会発表・研究テーマ・教授経験など、紹介したい記事を投稿できる
4. JALT や PanSIG の JSL SIG フォーラムに、発表者として参加できる(フォーラムの企画に興味のある方は [jsl@jalt.org](mailto:jsl@jalt.org) まで)
5. 入会方法は、JALT ホームページをご覧ください。 <http://jalt.org/main/membership>

Urban Edge Bldg 5F, 1-37-9 Taito,  
Taito-ku, Tokyo, 110-0016, JAPAN  
Tel: 03-3837-1630 Fax: 03-3837-1631  
<http://jalt.org/>

### JSL SIG Mission Statement

The mission of the Japanese as a Second Language Special Interest Group (JSL SIG) of the Japan Association for Language Teaching (JALT) is to serve as a resource for promoting JSL/JFL teaching, learning and research. We welcome JSL/ JFL teachers, learners, and researchers to join and take an active role in our SIG.

### JSL SIG Membership

The JSL SIG currently has around 50 members. To expand our network and share JSL information more dynamically, invite your colleagues and friends to join!

#### **Benefits of being a member :** Be able to

1. Contribute a paper to the peer-reviewed *JALT Journal of Japanese Language Education*, which is published bi-annually.
2. Receive SIG newsletters a few times a year.
3. Contribute articles, conference reports, teaching ideas, students' essays, call for papers, etc. to the SIG newsletter.
4. Participate the JSL forums as a presenter at the PanSIG and/or the JALT annual conference (contact [jsl@jalt.org](mailto:jsl@jalt.org))
5. Please refer to the JALT membership categories and fees on the JALT homepage. <http://jalt.org/main/membership>

